

委託契約書（案）

分任支出負担行為担当官 愛媛森林管理署長 山口 正浩（以下「委託者」という。）と〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇（以下「受託者」という。）は、令和 7 年度有害鳥獣誘引捕獲事業（八幡山国有林 2038 林班外 10）（翌債）の委託事業（以下「委託事業」という。）について、次のとおり委託契約を締結する。

本委託事業について、委託者と受託者は、各々の対等な立場における合意に基づいて、本契約書及び別添の「国有林野における有害鳥獣捕獲等事業の実施に係る共通仕様書（以下「共通仕様書」という。）」、「令和 7 年度有害鳥獣誘引捕獲事業（八幡山国有林 2038 林班外 10）（翌債）特記仕様書」（以下「特記仕様書」という。）に基づき、公正な委託契約を締結し、信義に従って誠実にこれを履行するものとする。

（実施する委託事業）

第 1 条 委託者は、次の委託事業の実施を受託者に委託する。

（1）事業名

令和 7 年度有害鳥獣誘引捕獲事業（八幡山国有林 2038 林班外 10）（翌債）

（2）事業の内容

共通仕様書、特記仕様書のとおり

（3）事業場所

愛媛県宇和島市柿原 八幡山国有林 2038 林班外 10

（4）履行期限

契約締結の日の翌日から令和 9 年 3 月 5 日まで

（委託事業の遂行）

第 2 条 受託者は、委託事業を、別添の委託事業計画書に記載された計画に従って実施しなければならない。当該計画が変更されたときも同様とする。

（委託費の限度額）

第 3 条 委託者は、委託事業に要する費用（以下「委託費」という。）として、金〇〇〇〇円（うち消費税及び地方消費税の額〇〇〇〇円）を超えない範囲内で受託者に支払うものとする。

（注）「消費税及び地方消費税の額」は、消費税法（昭和 63 年法律第 108 号）第 28 条第 1 項及び第 29 条並びに地方税法（昭和 25 年法律第 226 号）第 72 条の 82 及び第 72 条の 83 の規定により算出したもので、委託費の限度額に 100 分の 10 を乗じて得た金額である。

2 受託者は、委託費を別添の委託事業計画書に記載された費目の区分に従って使用しなければならない。当該計画が変更されたときも同様とする。

（契約保証金）

第 4 条 会計法（昭和 22 年法律第 35 号）第 29 条の 9 第 1 項に規定する契約保証金の納付は、予算決算及び会計令（昭和 22 年勅令第 165 号）第 100 条の 3 第 3 号の規定により免除する。

(事業管理責任者等)

第5条 受託者は、契約締結後14日以内(土日等を含む)に本契約に係る事業管理責任者、捕獲従事者、作業従事者を選任し、委託者に通知しなければならない。なお、事業管理責任者は次に掲げる各号の条件を満たしていること。

- (1) 環境省、森林管理局等が実施する認定鳥獣捕獲事業者講習の安全管理講習及び技能知識講習を修了した者、又は同等の講習を修了した者であること。
- (2) 本契約における捕獲手法に応じた狩猟免許を有していること。
- (3) 救急救命講習を受講していること。
- (4) 本事業と同様の捕獲方法による実績を有すること。
- (5) 受託者が直接雇用する者であること。

2 捕獲従事者は、鳥獣の捕獲等に従事する者を指し、以下の要件を満たしていること。

- (1) 環境省、森林管理局等が実施する認定鳥獣捕獲事業者講習の安全管理講習及び技能知識講習を修了した者、又は同等の講習を修了した者であること。
- (2) 本契約における捕獲手法に応じた狩猟免許を有していること。
- (3) 救急救命講習を受講していること。
- (4) 受託者が直接雇用する者であること。

3 作業従事者は、車両の運転、記録、連絡、わなの見回り、給餌、捕獲個体の運搬等、鳥獣の捕獲等に付随する補助作業及び事務的作業に従事する者を指し、受託者が直接雇用する者であること。

(委託事業計画書等)

第6条 受託者は、契約締結後14日以内(土日等を含む)に委託事業計画書(別紙様式1)、人件費明細書(別紙様式2)、事業工程表(別紙様式3)、事業組織表(別紙様式4)を作成し、監督職員に提出しなければならない。

なお、次の事項に係る書類を添付すること。

- (1) 共通仕様書1. 10(2)に掲げる事項
- (2) 共通仕様書2. 4. 1に掲げる事項

(再委託の制限及び承認手続き)

第7条 受託者は、委託事業の全部を一括して、又は主たる部分を第三者に委任し、又は請け負わせてはならない。

2 受託者は、本委託事業達成のため、委託事業の一部を第三者に委任し、又は請け負わせること(以下「再委託」という。)を必要とするときは、あらかじめ委託者の承認を得なければならない。ただし、再委託ができる事業は、原則として委託費の限度額に占める再委託の金額の割合(「再委託比率」という。以下同じ。)が50パーセント以内の業務とする。

3 受託者は、前項の再委託の承認を受けようとするときは、当該第三者の氏名又は名称、住所、再委託を行う業務の範囲、再委託の必要性及び契約金額について記載した再委託承認申請書(別紙様式8)を委託者に提出しなければならない。

4 受託者は、前項の書面に記載した事項を変更しようとするときは、あらかじめ委託者の承認を得なければならない。

5 再委託する業務が委託業務を行ううえで発生する事務的業務であって、再委託比率が50パーセント以内であり、かつ、再委託する金額が100万円以下である場合には、

軽微な再委託として第2項から前項までの規定は、適用しない。

6 受託者は、再委託する場合には、当該委託にかかる再委託先の行為について、委託者に対し、すべての責任を負うものとする。

7 再委託者が当該事業の実施能力を有しており、指名停止期間中でないこと。

（監督職員）

第8条 委託者は、本事業における適正な履行を確保するために監督職員を定め、受託者に通知するものとする。

2 監督職員は、契約図書に定められた事項の範囲内において、指示、承諾、協議等の職務を行うものとする。

3 監督職員は、監督職員がその権限を行使するときは、書面により行うものとする。ただし、緊急を要する場合、監督職員が受託者に対し口頭による指示等を行った場合には、受託者はその口頭による指示等に従うものとする。なお監督職員は、その口頭による指示等を行った後7日以内に書面で受託者に通知するものとする。

（実績報告）

第9条 受託者は、委託事業が終了したとき（委託事業を中止し、又は廃止したときを含む。）は、委託事業の成果を記載した委託事業実績報告書（別紙様式11）、人件費明細書（実績）（別紙様式12）、勤務簿（別紙様式13）、業務月報（別紙様式31）、業務日誌（日報）（別紙様式32）を委託者に提出しなければならない。

（検査）

第10条 委託者は、前条に規定する実績報告書の提出を受けたときは、これを受理した日から10日以内の日（当該期間の末日が休日（行政機関の休日に関する法律（昭和63年法律第91号）第1条第1項各号に掲げる日をいう。）に当たるときは、当該末日の翌日を当該期間の末日とする。）又は当該委託事業の履行期限の末日の属する年度の3月31日のいずれか早い日までに、当該委託事業が契約の内容に適合するものであるかどうかを当該委託事業実績報告書及びその他関係書類又は実地により検査を行うものとする。

2 委託者が前項に規定する検査により当該委託事業の内容の全部又は一部が本契約に違反し又は不当であることを発見したときは、委託者は、その是正又は改善を求めることができる。この場合においては、委託者が受託者から是正又は改善した給付を終了した旨の通知を受理した日から10日以内に、当該委託事業が契約の内容に適合するものであるかどうか再度検査を行うものとする。

（委託費の額の確定）

第11条 本委託事業は、概算契約であることからその精算が必要であり、委託者は、前条に規定する検査の結果、当該委託事業が契約の内容に適合すると認めたときは、委託費の額を確定し、受託者に対して通知するものとする。

2 前項の委託費の確定額は、委託事業に要した経費の実支出額と第3条第1項に規定する委託費の限度額のいずれか低い額とする。

（委託費の支払）

第12条 委託者は、前条の規定により委託費の額を確定し受託者に通知した後、受託者からの適法な精算払請求書（別紙様式16）を受理した日から30日以内にその支払を行

うものとする。

（契約の変更等）

第 13 条 委託事業の実施に当たり、仕様書等（図面、共通仕様書、特記仕様書、質問回答書をいう。以下同じ。）に誤謬等があることを発見した場合又は仕様書等に示された実施条件と実際の事業現場が一致しない場合あるいは仕様書等に記載されていない実施条件について予期することのできない特別な状態が生じた場合は、その取扱いについて委託者と受託者とが協議して定めるものとする。

2 前項の規定に基づき仕様書等を変更した場合において、委託者は、必要があると認めるときは履行期限又は委託費を変更するものとする。

3 前項の規定のほか、天候不良、関連事業の調整への協力その他受託者の責に帰すことができない事由により履行期間内に委託事業を完了することができない事態が生じた場合は、委託者と受託者とが協議のうえ、履行期限を変更することができる。

なお、委託者が変更事由が生じた日から 7 日以内に協議開始の日を通知しない場合には、受託者は協議開始の日を定め委託者に通知することができる。

4 委託費の変更については、委託者と受託者とが協議して定める。ただし、協議開始の日から 14 日以内に協議が整わない場合は、委託者が定めた金額を受託者に書面により通知する。

5 本項に記載のない作業条件等の変更による契約変更については、共通仕様書 1. 19「条件変更等」、1. 20「契約変更」のとおりとする。

（委託事業の中止等）

第 14 条 受託者は、下記に挙げるやむを得ない事由により、委託事業の遂行が困難となったときは、委託事業中止（廃止）申請書（別紙様式 6）を委託者に提出し、委託者と受託者とが協議のうえ、契約を解除し、又は契約の一部変更を行うものとする。

（1）第三者の土地への立ち入り許可が得られない場合

（2）関連する他の事業等の進捗が遅れたため、事業の続行を不相当と認めた場合

（3）環境問題等の発生により事業の継続が不相当又は不可能となった場合

（4）天災等により事業の対象箇所の状態が変動した場合

（5）第三者及びその財産、受託者、使用人等並びに監督職員の安全確保のため必要があると認めた場合

（6）前各号に掲げるもののほか、委託者が必要と認めた場合

2 前項の規定により契約を解除するときは、第 11 条から第 13 条の規定に準じ精算するものとする。

（計画変更の承認）

第 15 条 受託者は、前 2 条に規定する場合を除き、別添の委託事業計画書に記載された委託事業の内容又は経費の内訳を変更しようとするときは、委託事業計画変更承認申請書（別紙様式 7）を委託者に提出し、その承認を受けなければならない。

ただし、委託事業計画書の支出の部の区分欄に掲げる各経費のそれぞれ 30% 以内の増減の場合については、この限りでない。

2 委託者は、前項の承認をするときは、条件を付すことができる。

（履行遅滞に係る損害金等）

第 16 条 受託者の責に帰すべき事由により履行期間内に委託事業を完了することができ

ない場合は、委託者は、損害金の支払を、受託者に書面により請求することができる。

2 前項の損害金の額は、委託費に対し、遅延日数に応じ、年3.0パーセントの割合で計算した額とする。

3 委託者の責に帰すべき事由により第12条の規定に基づく委託費の支払が遅れた場合においては、受託者は、当該委託費に対し、遅延日数に応じ、支払遅延防止法第8条第1項の規定により決定された率を乗じて計算した額の遅延利息の支払を委託者に書面により請求することができる。

(契約の解除等)

第17条 委託者は、受託者が本契約に違反した場合、又は正当な理由なく履行の全部又は一部が不能となることが明らかとなったときは、契約を解除し、又は変更し、及び既に支払った金額の全部又は一部の返還を受託者に請求することができる。

(属性要件に基づく契約解除)

第18条 委託者は、受託者が次の各号の一に該当すると認められるときは、何らの催告を要せず、本契約を解除することができる。

(1) 法人等(個人、法人又は団体をいう。)の役員等(個人である場合はその者、法人である場合は役員又は支店若しくは営業所(常時契約を締結する事務所をいう。)の代表者、団体である場合は代表者、理事等、その他経営に実質的に関与している者をいう。以下同じ。)が、暴力団(暴力団員による不当な行為の防止等に関する法律(平成3年法律第77号)第2条第2号に規定する暴力団をいう。以下同じ。)又は暴力団員(同法第2条第6号に規定する暴力団員をいう。以下同じ。)であるとき。

(2) 役員等が、自己、自社若しくは第三者の不正の利益を図る目的、又は第三者に損害を加える目的をもって、暴力団又は暴力団員を利用するなどしているとき。

(3) 役員等が、暴力団又は暴力団員に対して、資金等を供給し、又は便宜を供与するなど直接的あるいは積極的に暴力団の維持、運営に協力し、若しくは関与しているとき。

(4) 役員等が、暴力団又は暴力団員であることを知りながらこれを不当に利用するなどしているとき。

(5) 役員等が、暴力団又は暴力団員と社会的に非難されるべき関係を有しているとき。

(行為要件に基づく契約解除)

第19条 委託者は、受託者が自ら又は第三者を利用して次の各号の一に該当する行為をした場合は、何らの催告を要せず、本契約を解除することができる。

(1) 暴力的な要求行為

(2) 法的な責任を超えた不当な要求行為

(3) 取引に関して脅迫的な言動をし、又は暴力を用いる行為

(4) 偽計又は威力を用いて契約担当官等の業務を妨害する行為

(5) その他前各号に準ずる行為

(談合等の不正行為に係る解除)

第20条 委託者は、本契約に関し、受託者が次の各号の一に該当するときは、契約の全部又は一部を解除することができる。

- (1) 公正取引委員会が、受託者又は受託者の代理人に対して私的独占の禁止及び公正取引の確保に関する法律（昭和 22 年法律第 54 号。以下「独占禁止法」という。）第 7 条又は第 8 条の 2（同法第 8 条第 1 号又は第 2 号に該当する行為の場合に限る。）の規定による排除措置命令を行ったとき、同法第 7 条の 2 第 1 項（同法第 8 条の 3 において読み替えて準用する場合を含む。）の規定による課徴金納付命令を行ったとき又は同法第 7 条の 4 第 7 項又は同法第 7 条の 7 第 3 項の規定による課徴金の納付を命じない旨の通知を行ったとき。
- (2) 受託者又は受託者の代理人（受託者又は受託者の代理人が法人にあっては、その役員又は使用人を含む。）が刑法（明治 40 年法律第 45 号）第 96 条の 6 若しくは第 198 条又は独占禁止法第 89 条第 1 項若しくは第 95 条第 1 項第 1 号の規定による刑の容疑により公訴を提起されたとき。
- 2 受託者は、本契約に関して、受託者又は受託者の代理人が前項各号に該当した場合には、速やかに、当該処分等に係る関係書類を委託者に提出しなければならない。

（再委託契約等に関する契約解除）

- 第 21 条 受託者は、契約後に再受託者等が解除対象者であることが判明したときは、直ちに当該再受託者等との契約を解除し、又は再受託者等に対し当該解除対象者（再受託者等）との契約を解除させるようにしなければならない。
- 2 委託者は、受託者が再受託者等が解除対象者であることを知りながら契約し、若しくは再受託者等の契約を承認したとき、又は正当な理由がないのに前項の規定に反して当該再受託者等との契約を解除せず、若しくは再受託者等に対し当該解除対象者（再受託者等）との契約を解除させるための措置を講じないときは、本契約を解除することができる。

（表明確約）

- 第 22 条 受託者は、第 18 条から第 20 条各号のいずれにも該当しないことを表明し、かつ、将来にわたっても該当しないことを確約する。
- 2 受託者は、第 18 条から第 20 条各条の一に該当する行為をした者（以下「解除対象者」という。）を再受託者等（再委託の相手方及び再委託の相手方が当該契約に関して個別に契約する場合の当該契約の相手方をいう。以下同じ。）としないことを確約する。

（違約金）

- 第 23 条 次の各号のいずれかに該当する場合においては、委託者は受託者に対し、違約金として契約金額の 100 分の 10 に相当する額を請求することができる。
- (1) 前条の規定により本契約が解除された場合
- (2) 受託者がその債務の履行を拒否し、又は、受託者の責めに帰すべき事由によって受託者の債務について履行不能となった場合
- 2 次の各号に掲げる者が本契約を解除した場合は、前項第二号に該当する場合とみなす。
- (1) 受託者について破産手続開始の決定があった場合において、破産法（平成 16 年法律第 75 号）の規定により選任された破産管財人
- (2) 受託者について更生手続開始の決定があった場合において、会社更生法（平成 14 年法律第 154 号）の規定により選任された管財人
- (3) 受託者について再生手続開始の決定があった場合において、民事再生法（平成 11

年法律第 225 号) の規定により選任された再生債務者等

- 3 委託者は、前条の規定により本契約を解除した場合、これにより受託者に生じる損害について、何ら賠償ないし補償することは要しないものとする。

(談合等の不正行為に係る違約金)

第 24 条 受託者は、本契約に関し、次の各号の一に該当するときは、委託者が前条により契約の全部又は一部を解除するか否かにかかわらず、契約金額の 100 分の 10 に相当する額を違約金として委託者が指定する期日までに支払わなければならない。

- (1) 公正取引委員会が、受託者又は受託者の代理人に対して独占禁止法第 7 条又は第 8 条の 2 (同法第 8 条第 1 号又は第 2 号に該当する行為の場合に限る。) の規定による排除措置命令を行い、当該排除措置命令が確定したとき又は同法第 66 条第 4 項の規定による審決において、同法の規定に違反する行為があった旨が明らかにされたとき。
- (2) 公正取引委員会が、受託者又は受託者の代理人に対して独占禁止法第 7 条の 2 第 1 項 (同法第 8 条の 3 において読み替えて準用する場合を含む。) の規定による課徴金納付命令を行い、当該納付命令が確定したとき又は同法第 66 条第 4 項の規定による審決において、同法の規定に違反する行為があった旨が明らかにされたとき。
- (3) 公正取引委員会が、受託者又は受託者の代理人に対して独占禁止法第 7 条の 4 第 7 項又は同法第 7 条の 7 第 3 項の規定による課徴金の納付を命じない旨の通知を行ったとき。
- (4) 受託者又は受託者の代理人 (受託者又は受託者の代理人が法人にあっては、その役員又は使用人を含む。) に係る刑法第 96 条の 6 若しくは第 198 条又は独占禁止法第 89 条第 1 項若しくは第 95 条第 1 項第 1 号の規定による刑が確定したとき。

2 受託者は、前項第 4 号に規定する場合に該当し、かつ次の各号のいずれかに該当するときは、前項の契約金額の 100 分の 10 に相当する額のほか、契約金額の 100 分の 5 に相当する額を違約金として委託者が指定する期日までに支払わなければならない。

- (1) 前項第 2 号に規定する確定した納付命令について、独占禁止法第 7 条の 3 の規定の適用があるとき。
- (2) 前項第 4 号に規定する刑に係る確定判決において、受託者又は受託者の代理人 (受託者又は受託者の代理人が法人にあっては、その役員又は使用人を含む。) が違反行為の首謀者であることが明らかになったとき。
- (3) 受託者が委託者に対し、独占禁止法に抵触する行為をしていない旨の誓約書を提出しているとき。

3 受託者は、契約の履行を理由として、前 2 項の違約金を免れることができない。

4 第 1 項及び第 2 項の規定は、委託者に生じた実際の損害の額が違約金の額を超過する場合において、委託者がその超過分の損害につき賠償を請求することを妨げない。

(損害賠償)

第 25 条 委託者は、第 18 条、第 19 条、第 20 条及び第 21 条第 2 項の規定により本契約を解除した場合は、これにより受託者に生じた損害について、何ら賠償ないし補償することは要しない。

2 受託者は、受託者が第 18 条、第 19 条、第 20 条及び第 21 条第 2 項の規定により本契約を解除した場合において、委託者に損害が生じたときは、その損害を賠償するものとする。

（不当介入に関する通報・報告）

第 26 条 受託者は、自ら又は再受託者等が、暴力団、暴力団員、社会運動・政治運動標ぼうゴロ等の反社会的勢力から不当要求又は業務妨害等の不当介入（以下「不当介入」という。）を受けた場合は、これを拒否し、又は再受託者等をして、これを拒否させるとともに、速やかに不当介入の事実を委託者に報告するとともに、警察への通報及び捜査上必要な協力を行うものとする。

（著作権等）

第 27 条 受託者は、委託事業により納入された著作物に係る一切の著作権（著作権法（昭和 45 年法律第 48 号）第 27 条及び第 28 条に規定する権利を含む。）を、著作物の引渡し時に委託者に無償で譲渡するものとし、委託者の行為について著作者人格権を行使しないものとする。

- 2 受託者は、第三者が権利を有する著作物を使用する場合は、原著作者等の著作権及び肖像権等の取扱いに厳重な注意を払い、当該著作物の使用に関して費用の負担を含む一切の手続きを行うものとする。
- 3 受託者は、委託者が著作物を活用する場合及び委託者が認めた場合において第三者に二次利用させる場合は、原著作者等の著作権及び肖像権等による新たな費用が発生しないように措置するものとする。それ以外の利用に当たっては、委託者は受託者と協議のうえ、その利用の取り決めをするものとする。
- 4 本契約に基づく作業に関し、第三者と著作権及び肖像権等に係る権利侵害の紛争等が生じた場合、当該紛争等の原因が専ら委託者の責めに帰す場合を除き、受託者は自らの責任と負担において一切の処理を行うものとする。この場合、委託者は係る紛争等の事実を知ったときは、受託者に通知し、必要な範囲で訴訟上の防衛を受託者に委ねる等の協力措置を講じるものとする。

（物品管理）

第 28 条 受託者は、委託者から貸与を受けた物品（以下「貸与物品」という。）や、委託費により購入した物品（以下「調達物品」という。）について、それを記録した物品管理簿（別紙様式 14）を備え付け、常にその数量や状態を明らかにしておかなければならない。

- 2 受託者は、委託者から物品の貸与を受ける際は、国からの支給材料（貸与物品）等借用書（別紙様式 5）を提出して借り受け、事業完了後速やかに国からの支給材料（貸与物品）等返納届（別紙様式 15）を添えて返納しなければならない。
- 3 受託者は、調達物品について、委託事業により取得したものである旨の標示（別紙様式 10）をするとともに、物品管理簿（別紙様式 14）に登録しなければならない。また、受託者は、物品管理簿の写しを委託事業実績報告書提出の際に併せて提出しなければならない。
- 4 委託者は、委託事業終了後、調達物品について、その返納の要否を決定し、返納を要するものと指定した場合は、引渡日時、引渡場所等、引渡しに必要な事項を定め、その旨受託者に指示するものとする。ただし、受託者において、調達物品を同種の事業で継続して使用したい場合は、物品継続使用申出書（別紙様式 17）により委託者に申し出て、承認を受けなければならない。なお、受託者は、当該継続使用物品を使用している間、毎月末ごとに物品使用状況報告書（別紙様式 20）を委託者に提出しなければならない。また、受託者は、物品継続使用を終了（中止）する際には、物品継続使用終了（中止）実績報告書（別紙様式 21）を委託者に提出しなければならない。

- 5 委託者は、受託者から物品継続使用終了（中止）実績報告書が提出された際、又は委託者の都合によって当該継続使用物品を返納させる必要が生じた際には、物品引渡指示書により受託者にその旨通知するものとする。
- 6 受託者は、前項の規定により通知を受けた場合、直ちに当該継続使用物品を委託者に返納すること。ただし、受託者の都合により直ちに返納できない場合は、物品引渡延長申請書（別紙様式 19）により申し出て、委託者の承認を受けなければならない。
- 7 受託者の貸与物品や調達物品の返納に要する費用は受託者の負担とする。
- 8 受託者は、貸与物品や調達物品を返納するに当たり、委託者が当該物品の使用・保管場所を決定するまでの間、無償で保管するものとする。
- 9 受託者は、貸与物品や調達物品の保全に努めることとするが、損傷等により使用できなくなった場合は、物品使用不能報告書（別紙様式 9）により報告し、代品を納め若しくは原状に復して返納し、又は返納に代えてその損害を賠償しなければならない。
- 10 委託事業終了後、調達物品のうち返納を要しないものとして委託者が指定し、受託者が売却処分等により収益を得た場合は、受託者は収益納付報告書（別紙様式 18）により委託者に報告し、委託者からの指示に従い収益を国庫に納付しなければならない。

（委託事業の調査）

第 29 条 委託者は、必要に応じ、受託者に対し、実績報告書における委託費の精算に係る審査時その他の場合において、委託事業の実施状況、委託費の使途その他必要な事項について所要の調査報告を求め、又は実地に調査することができるものとし、受託者はこれに応じなければならないものとする。

（帳簿等）

第 30 条 受託者は、本委託事業の委託費について、独立した帳簿を作成・整備することとし、受託者が実施する他の事業等の経費とは明確に区分して経理しなければならない。

- 2 受託者は、委託費に関する帳簿への委託費の収入支出の記録を、当該収入支出の都度、これを行うものとする。
- 3 受託者は、前項の帳簿及び委託事業実績報告書に記載する委託費の支払実績を証するための証拠書類又は証拠物（以下「証拠書類等」という。）を、受託者の文書管理規程等の保存期限の規定にかかわらず、当該委託事業終了の翌年度の 4 月 1 日から起算して 5 年間、整備・保管しなければならない。
- 4 受託者は、委託事業実績報告書の作成・提出に当たっては、帳簿及び証拠書類等と十分に照合した委託事業に要した経費を記載しなければならない。
- 5 受託者は、前各項の規定のいずれかに違反し又はその他不適切な委託費の経理を行ったと委託者が認めた場合には、当該違反等に係る委託費の交付を受けることができず、又は既にその交付を受けている場合には、委託者の指示に従い当該額を返還しなければならない。

（旅費及び賃金）

第 31 条 受託者が、委託費で支払う旅費及び賃金については、いずれも本委託事業の実施に直接関係ある出張又は用務に従事した場合に限るものとする。

- 2 受託者は、前項の規定に違反した不適切な委託費の経理を行ったと委託者が認めた

場合には、当該違反等に係る委託費の交付を受けることができず、又は既にその交付を受けている場合には、委託者の指示に従い当該額を返還しなければならない。

（秘密の保持等）

第 32 条 受託者は、本委託事業に関して知り得た業務上の秘密を本契約期間にかかわらず第三者に漏らしてはならない。

2 受託者は、委託者の許可なくして本委託事業に関する資料を転写し、又は第三者に閲覧若しくは貸出ししてはならない。

（個人情報に関する秘密保持等）

第 33 条 受託者及び本委託事業に従事する者（従事した者を含む。以下「委託事業従事者」という。）は、本委託事業に関して知り得た個人情報（生存する個人に関する情報であつて、当該情報に含まれる氏名、生年月日その他の記述等により特定の個人を識別することができるもの（他の情報と容易に照合することができ、それにより特定の個人を識別することができることとなるものを含む。）をいう。以下同じ。）を委託事業の遂行に使用する以外に使用し、又は提供してはならない。

2 受託者及び委託事業従事者は、保有した個人情報の内容をみだりに他人に知らせ、又は不当な目的に利用してはならない。

3 前 2 項については、本委託事業が終了した後においても同様とする。

（個人情報の複製等の制限）

第 34 条 受託者は、委託事業を行うために保有した個人情報について、毀損等に備え重複して保存する場合又は個人情報を送信先と共有しなければ委託事業の目的を達成することができない場合以外には、複製、送信、送付又は持ち出しをしてはならない。

（個人情報の漏えい等の事案の発生時における対応）

第 35 条 受託者は、委託事業を行うために保有した個人情報について、漏えい等安全確保のうえで問題となる事案を把握した場合には、直ちに被害の拡大防止等のため必要な措置を講ずるとともに、委託者に事案が発生した旨、被害状況、復旧等の措置及び本人への対応等について直ちに報告しなければならない。

（委託事業終了時における個人情報の消去及び媒体の返却）

第 36 条 受託者は、委託事業が終了したときは、本委託事業において保有した各種媒体に保管されている個人情報については、直ちに復元又は判読不可能な方法により情報の消去又は廃棄を行うとともに、委託者より提供された個人情報については、返却しなければならない。

（再委託の条件）

第 37 条 受託者は、委託者の承認を受け、本委託事業を第三者に再委託する場合は、個人情報の取扱いに関して必要かつ適切な監督を行い、前四条に規定する委託者に対する義務を当該第三者に約させなければならない。

（事業実施に係る外部手続き等）

第 38 条 本事業実施に係る関係官公庁への手続きや、地元関係者との交渉等については共通仕様書 1. 12「関係官公庁への手続き等」及び、1. 13「地元関係者との交渉

等」のとおりとする。

(事業実施に係る土地への立ち入り等)

第 39 条 本事業実施に係る国有地、公有地、私有地への立ち入りや利用については共通仕様書 1. 14「土地への立ち入り等」のとおりとする。

(関係法令及び条例の遵守)

第 40 条 受託者は、事業の実施に当たり共通仕様書 1. 16「関係法令及び条例の遵守」に掲げる関係諸法令及び条例等を遵守しなければならない。

(一般的損害)

第 41 条 本契約の履行に関して生じた一切の人的及び物的損害については、受託者がこれを負担するものとする。ただし、委託者の責に帰すべき事由による損害又は本契約で他に別段の定めをした場合の損害については、この限りでない。

2 天災その他の不可抗力によって生じた損害については、双方協議のうえ、その負担額を定めるものとする。

(第三者の損害)

第 42 条 受託者は、本契約の履行に当たって第三者に損害を及ぼしたときは、その賠償の責を負うものとする。委託者の責に帰すべき事由によるときはこの限りでない。

(契約不適合責任)

第 43 条 委託者は、成果物が種類又は品質に関して契約の内容に適合しないもの（以下「契約不適合」という。）であるときは、受託者に対して相当の期間を定めて成果物の修補を請求し、又は修補に代え若しくは修補とともに損害の賠償を請求することができる。

2 前項の規定による成果物の修補又は損害賠償の請求は、第 9 条第 1 項の規定による引渡しを受けた日から 3 年以内に行わなければならない。ただし、その不適合が受託者の故意又は重大な過失により生じた場合には、当該請求を行うことのできる期間は 10 年とする。

3 委託者は、成果物の引渡しの際に不適合があることを知ったときは、第 1 項の規定にかかわらず、その旨を直ちに受託者に通知しなければ、当該成果物の修補又は損害賠償の請求をすることはできない。ただし、受託者がその不適合があることを知っていたときは、この限りでない。

4 第 1 項の規定は、成果物の瑕疵が設計図書の記載内容、委託者の指示又は貸与品等の性状により生じたものであるときは適用しない。ただし、受託者がその記載内容、指示又は貸与品等が不相当であることを知りながらこれを通知しなかったときは、この限りでない。

(成果物の使用等)

第 44 条 受託者は、委託者の承諾のもと単独又は他者と共同で成果物を発表することができる。ただし、本契約書第 27 条に基づき、一切の著作者人格権を行使しないものとする。

（特許権等の使用）

第 45 条 受託者は、特許権、実用新案権、意匠権、商標権その他日本国の法令に基づき保護される第三者の権利（以下「特許権等」という。）の対象となっている履行方法を使用するときは、その使用に関する一切の責任を負わなければならない。ただし、委託者がその履行方法を指定した場合において、設計図書に特許権等の対象である旨の明示がなく、かつ、受託者がその存在を知らなかったときは、委託者は、受託者がその使用に関して要した費用を負担しなければならない。

（安全等の確保）

第 46 条 受託者は、共通仕様書 1. 29「安全等の確保」に従い事業管理責任者、捕獲従事者及び捕獲作業者並びに第三者の安全確保に努めなければならない。また、本事業実施に係る安全連絡体制を定めた安全管理規程を作成し、事業計画書とともに監督職員に提出しなければならない。

（保険加入の義務）

第 47 条 受託者は、雇用者等の雇用実態に応じて共通仕様書 1. 35「保険加入の義務」（１）に掲げる保険に加入しなければならない。
2 受託者は、雇用者等の業務に関して生じた負傷、疾病、死亡及びその他の事故に対して、責任を持って適正な補償をしなければならない。

（損害賠償保険等加入の義務）

第 48 条 受託者は、共通仕様書 2. 3「損害賠償保険等加入の義務」に掲げる保険に加入しなければならない。

（疑義の解決）

第 49 条 前各条のほか、本契約に関して疑義を生じた場合には、委託者と受託者とが協議のうえ、解決するものとする。

本契約の証として本書 2 通を作成し、当事者記名押印のうえ、各自 1 通を保有する。

令和 年 月 日

委託者	住 所	愛媛県松山市朝美 2 丁目 6 番 32 号
	氏 名	分任支出負担行為担当官 愛媛森林管理署長 山口 正浩

受託者	住 所
	氏 名